

南信州・遠山郷における歴史的文化的資源の活用

—「神様王国」づくりを事例に—

高 木 秀 和

I. はじめに

- (1) 研究の背景
- (2) 対象地域の概況

II. 遠山郷の歴史と神仏勧請の背景

III. 「神様王国」づくりのプロセス

- (1) 構想期
- (2) 設立準備期
- (3) 充実期
- (4) 安定期

IV. 「神様王国」に対する住民の認識と評価

V. おわりに

I. はじめに

(1) 研究の背景

我が国が開発ラッシュにわいた高度経済成長期において、全国総合開発計画やそれともなう人口移動により地域構造に歪みが生じ、中心と周辺、過密と過疎という問題が顕在化した。1977年に打ち出された三全総では定住圏構想がうたわれ、大都市圏と地方の均衡のとれた発展が目指されたと同時に、「ふるさと創生1億円事業」に象徴されるように地方自治体が独自に地域づくりを企画・運営することができるようになり、町おこしや村おこしの萌芽がみられた。その際、地域の歴史や文化を生かした地域づくりが行われたところも少なくなかった。

それらの結果、周辺地域では一時的に人口

減少が抑制され、大都市圏から地方への人口の還流現象がみられた地域もあったが、バブル経済を経験した日本では東京一極集中がすすみ、社会的空白地域¹⁾や限界集落のように過疎化や少子高齢化のために存続が困難な集落も現れた。こうした集落では、耕作放棄地や廃屋の増加とともに、地域のシンボルである祭りの簡略化、廃止や学校の統廃合がみられることも多く、住民の活力を低下させる要因となった。そのような中でも、創意や工夫によりにぎわいの創出や再生に成功した地域が現れ、1990年代はもちろん今世紀に入るとその動きがより活発化した²⁾。

その際、地域に伝わる祭りや民話などが地域づくりに利用されることは少なくない。伝統文化の商品化をめぐり、民俗学では欧米からもたらされたフォークロリズムやフェイクロアという用語を用いて議論がすすめられており³⁾、伝統的建造物の価値を問うことから始まった真正性（オーセンティシティ）の議論は、文化財に留まらず、ひろく地域づくりや観光などの伝統や文化を生かした現代的な取り組みにまで波及している。

また、伝統文化を商品化した観光が地域に与える影響が懸念されることもある。松井圭介はキリシタン・ツーリズムがみられる少子高齢化や過疎化が進行する長崎県五島列島を事例に、世界文化遺産として登録されることで行政により教会堂が保護されることを期待

キーワード：「神様王国」、歴史的文化的資源、地域づくり、「新たな公」、遠山郷

する一方、宗教空間としての教会堂や人々の暮らしが変容する危険性があることを指摘している⁴⁾。

加えて、研究目的に限らず外部から地域の伝統文化に関わる者の影響も考える必要があるだろう。彼らの立ち位置を考えるうえで参考になるのが、日本の民俗学界でも議論されるようになったパブリック・フォークロア(公共民俗学)⁵⁾という概念である。伝統文化の振興や商品化には住民だけではなく、博物館や教育委員会などの「公共」部門で民俗学に携わる者のほか、大学などの研究機関に属す研究者、在野の研究者など多様な立場の人々が関与している⁶⁾。菅豊は、新たな公共民俗学は公共部門の民俗学だけでなくアカデミック民俗学の問題でもあるとし、「それぞれのミッションを規定している立場性を乗り越え」ることを提唱している。また、「アカデミック民俗学が、公共部門の行為やそれ自体に変化を及ぼすインパクトを民族誌的に批判研究するといった第三者的、限定的な関与の枠組みすら乗り越えなければならない」と説いている⁷⁾。

たしかに立場性を超えて新たな枠組みを構築することは理解できるが、アカデミック部門の研究者として地域に貢献することも可能であろう。中川正は、文化地理学研究の手順を「パターンの発見」→「プロセスの説明」→「意味の解釈」→「応用」と説明している。そして「実用の学」としての性格も強かったはずの地理学の応用研究を、学術的な意義から位置づける必要があると述べている⁸⁾。

これらの議論を踏まえると、研究者として地域に与える正の貢献や負の影響⁹⁾を内省¹⁰⁾し、伝統文化の商品化をすすめる場合には繰り返し地域の意向とすり合わせていくことが求められる。そして、「実用の学」としての地理学の応用研究を蓄積していくことも必要である。

ところで、本稿が対象とする長野県飯田市

南信濃(旧下伊那郡南信濃村)は、典型的な過疎・高齢化山村である。過疎・高齢化対策として、1980年代に当時の村長をはじめ住民たちにより観光と福祉の両面で村おこしが行われ、たとえば1987年には人口3千人規模の村では全国初となるデイサービスセンターが設立されるなど、全国から脚光を浴びた経験がある。さらに、日帰り温泉施設の開設やグリーンツーリズムの実施など、村おこしは軌道に乗っていた。しかし、2005年の飯田市との合併により公務員世帯を中心に飯田市街地への転出が相次ぐなど人口・世帯数の減少¹¹⁾が続き、合併前に比べ活力が失われてしまったようにみえた。

合併の是非をめぐる地域が揺れ動いていた2000年代前半に、この地域に存在する歴史的文化的資源に着目した藤田佳久と筆者は、地域活性化の一助になればという願いから、数多くの神仏が祀られていることから藤田が命名した「神様王国」という地域づくりを行ってきた。具体的には、「神様王国」は南信濃の中心集落である和田地区に祀られた神仏を33ヶ所選定し、来訪者が周遊ルートに沿って神仏を巡るという観光の一形態である。それ以上に、単なる観光ではなく遠山郷の豊かな自然、歴史や文化、住民という人的資源を有機的に結びつけ、合併により活力を失ってしまった山村の自立を目指そうとする地域づくりの取り組みである。

本稿でいう歴史的文化的資源とは、この地域に住む人々が長年にわたり大切にしてきた石神仏やそれを安置する小規模な建屋(帳屋)などの信仰に関する造形物のことである¹²⁾。「神様王国」の「神様」には仏教で信仰される偶像も含むため、ここでいう「神様」とは、遠山郷でひろく庶民信仰の対象となってきた石神仏や帳屋に祀られた御札を指す。そのほか、国の重要無形民俗文化財である「遠山の霜月祭」をはじめ、帳屋などに祀られる勧請された神仏に祈りをささげる祭りなどの

行事も含む¹³⁾。

既報告の成果からこれまでの筆者らの取り組みをまとめると、まず和田地区中心部に祀られる石神仏などの有形の歴史的文化的資源の位置やその由来を把握した¹⁴⁾。調査結果から神仏の多さを確認した筆者らは、神仏を活用した地域づくりの方法を提案し¹⁵⁾、それが地域に受け入れられる過程と「神様王国」が開設されるまでのプロセスをまとめた¹⁶⁾。そして、開設後の運営状況とモニターツアー客の評価を示すなど和田地区における「神様王国」づくりのプロセスを整理した¹⁷⁾。その後、和田地区に接する旧南信濃村内の木沢、八重河内、南和田地区で神仏の基礎調査を行った¹⁸⁾。また、和田地区の「神様王国」を構成する自然、歴史、文化、人的資源に着目しながら、「神様王国」づくりとその背景をまとめた成果もある¹⁹⁾。

本稿は、まず筆者らの既報告の成果を用いながら和田地区に多くの神仏が勧請された背景を示し、「神様王国」づくりのプロセスを時期区分しながら整理する。そして、住民らを対象としたワークショップの未公表の分析などを通じて浮上した「神様王国」の特徴や問題点について、おもに「神様王国」に深く関与する住民からの聞き取りの結果と対比させた。

筆者らが住民とともにつくりあげてきた「神様王国」は、個々の神仏やそれに付随する伝承を通じて、観光客のみならず住民に対して農林業などの生業や水害などの災厄の歴史を伝える存在である。それに加え、低迷する地域経済を活性化させ、飯田市との合併により政治的な主体性を失ってしまった合併山村に新たな住民組織をつくり、活力を取り戻してもらおうとするねらいがある。それだけに、従来の歴史地理学の領域の枠におさまらない実践的研究となるが、「観光に関する歴史地理学研究の成果を社会に発信する」という共同課題の目標のもと、繰り返し行っ

た基礎調査の成果が地域づくりに応用できる可能性を提示する。

(2) 対象地域の概況

長野県飯田市南信濃は北接する旧上村とともに遠山郷と呼ばれ、長野県の南東端に位置する(図1)。遠山郷は急峻な南アルプスを隔てて静岡県と接し、天竜川の支流である遠山川と八重河内川にほぼ沿って中央構造線が貫いている。一方、南西部は天龍村と接しており、同村内にあるJR平岡駅が最寄り駅である。また、飯田市街地がある伊那谷とは伊那山地により隔てられており、1994年に両者を結ぶ矢筈トンネルが開通すると、飯田市街地との時間距離は大幅に短縮した。

江戸時代に遠山六ヶ村と呼ばれたこの地域は、明治時代以降合併と分離を繰り返し、1960年に南信濃村が誕生した。そして平成の大合併により、南信濃村は2005年10月に新たな飯田市へ遠山郷の北部にある上村とともに加わった。

遠山郷では、急傾斜地を利用した畑作や、豊富な森林資源を伐採、搬出する林業が1960年代までさかんに行われてきたが、人口流出や高齢化による労働力の減少が耕作放棄地を生みだし、過疎法などにもとづく公共事業に従事する者が増えた。また、自家用車の普及と道路整備が都市部への通勤や転出を促し、前述したように飯田市との合併がその動きに拍車をかけた。人口および世帯数は、1955年には6,563人、1,339世帯を数えたが、2010年には1,845人、846世帯となり、両者ともに大幅に減少した。

南信濃の高齢者比率は、飯田市へ合併した2005年には47.6%であったが、2011年には51.7%を記録するなど少子高齢化が著しく、小中学校の統廃合や担い手不足により各地区に伝わる「遠山の霜月祭」に簡略化や休止の動きがみられる。前者に着目すると、南和田、八重河内、木沢の各小学校は1970年、

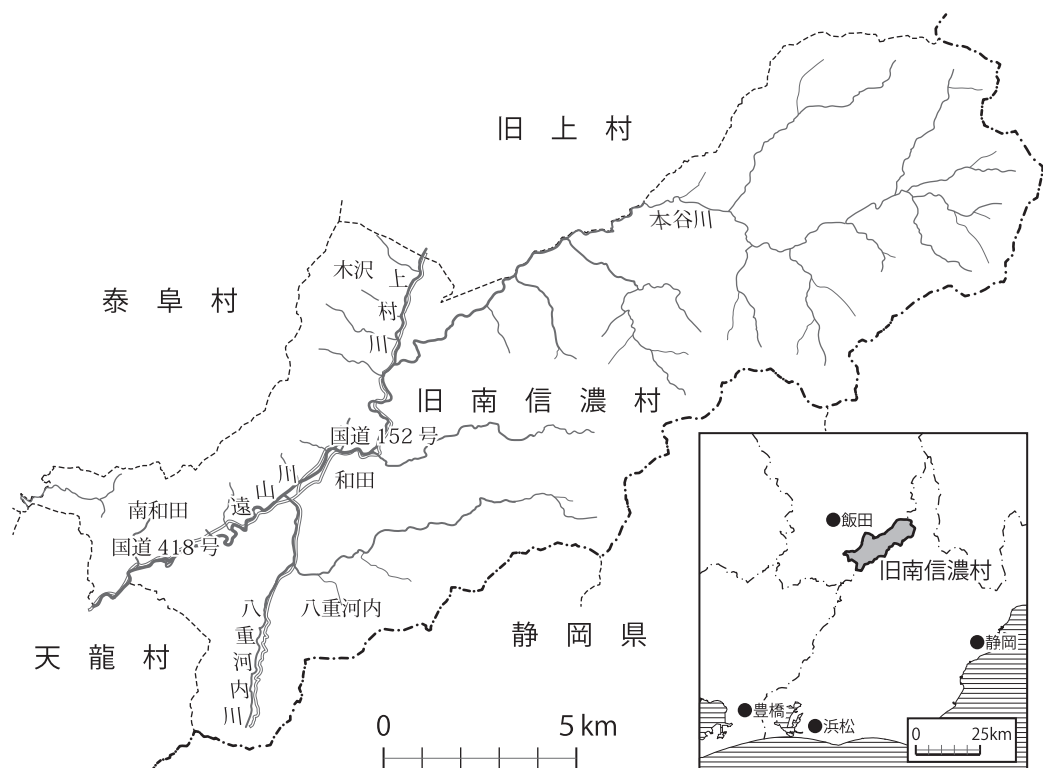


図1 旧南信濃村の概要

1974年、2000年に閉校し²⁰⁾、旧南信濃村域の小学生は和田小学校に通学している。上村中学校は2009年に閉校し、旧上村域の中学生は和田地区の遠山中学校に通学している。また、霜月祭の休止時期に着目すると、飯田市に合併した2005年以降だけでも、南和田地区の遠山八幡宮は2009年、木沢地区の白山神社は2010年の開催を最後に休止が決定された²¹⁾。

II. 遠山郷の歴史と神仏勧請の背景

遠山郷に祀られている多くの庶民信仰の神仏は、林業と水害などの多くの災厄との関係を教えてくれる存在である(図2)。本章では、林業、水害などの災厄、神仏との関係の歴史を整理する²²⁾。

三者の関係をみると、まず江戸幕府は1677(延宝5)年以降、遠山谷の山々を樽木山に設

定し「樽木成村」とし、森林資源を保護するために「他国者」の立ち入りを禁じた²³⁾。その後、乱伐により尽山化したために1776(安永5)年以降は年貢を金納とし、この地域への立ち入り規制がしだいに緩むようになった。

乱伐が繰り返された18世紀前半、遠山谷は遠山地震のほか、相次いで天候不順と水害に見舞われ、それらにより多くの村人が餓死した²⁴⁾。赤石山系は中生層の破砕帯からなるために土砂崩壊が生じやすいうえ、山地斜面の土留めの役割を果たしていた樹木が乱伐により減少した。近世の商都大坂を守ることを目的に、淀川上流山間部などで「土砂留」のために植林が行われた事例もあり²⁵⁾、ただちに乱伐と水害の多発を結びつけられないが、遠山谷では「土砂留」は行われておらず、水害

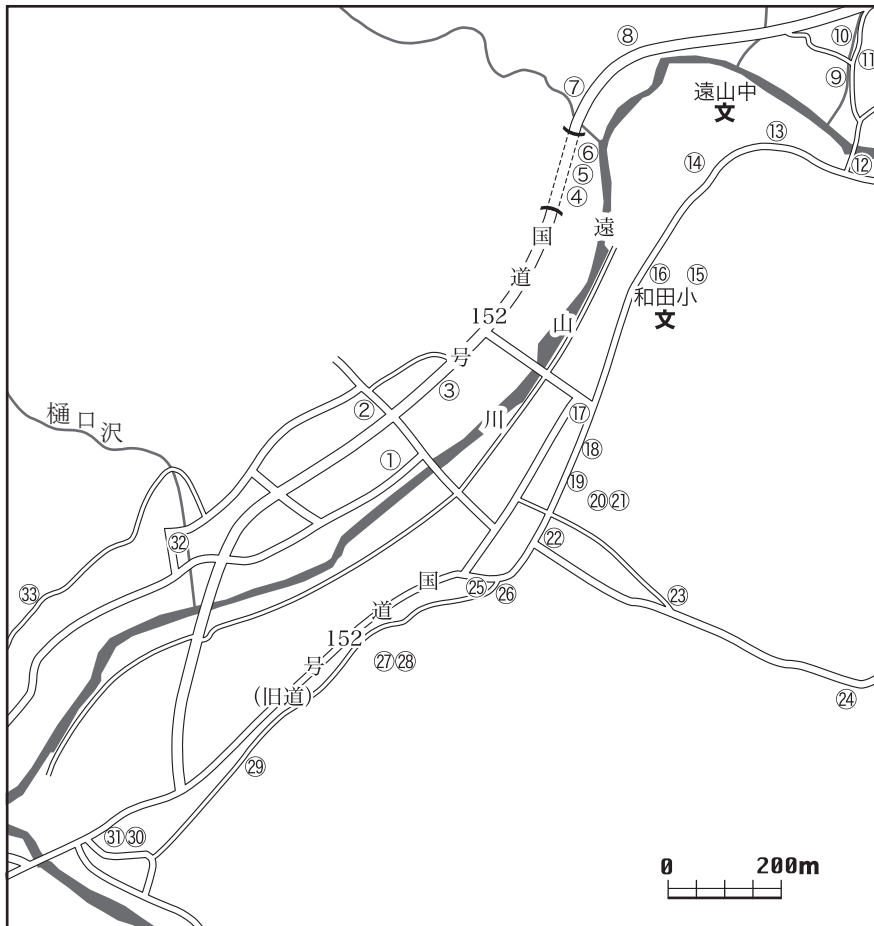


図2 「神様王国」を構成する神仏の位置

注：神仏名は以下のとおり。①遠山川の洪水防止を願う水神、②巨大ケヤキが愛宕神社に変身、③水田の豊作を願った條山様、④マムシ除けを願った知立神社、⑤不詳の石仏、⑥神々の力による水害防止の願い、⑦金七の滝と不動明王、⑧若くして亡くなった霊を祀る若宮神社、⑨農耕や山の神々が押出の集落を見守るセンター、⑩沢沿いの小さな水神、⑪富士浅間神社に加わった山住神社、⑫村の入口を守る水神様、⑬中央構造線の自然が生んだ奇跡の神、⑭天保の大飢饉からの救いを願った神々、⑮新町全体の守り神、出山稲荷、⑯災害と疫病防止を願った津島様、⑰失せ物が見つかる愛宕様、⑱町場と街道を守る神々、⑲村人に慕われた「おさま婆様」、⑳遠山氏の菩提寺である龍淵寺、㉑脚光浴びる「観音霊水」、㉒小池沢と街道の交点を守る神々、㉓個人神として記られた津島様と行者様、㉔夜泣きがおさまる子安様、㉕遠山郷とつながる神話の神々、㉖村の街道の入口を守る神々、㉗高平の薬師様、㉘講で支える高平山稲荷神社、㉙街道の分岐点に立つ道標、㉚霜月祭、御柱祭などが行われる諏訪神社、㉛諏訪神社下の石仏群、㉜樋口沢の水害防止を願う神々、㉝山原入口の観音と神々

を起こさせた要因のひとつとして乱伐は無視できない。

同じ頃、中馬による輸送を担う馬喰や秋葉山を目指す旅人などが秋葉道を往来するようになると、当時の和田村の人々は暮らしの安寧を祈って彼らから神仏に関する情報を入手

したと思われる。当時、石神仏も祀られただろうが、風化の激しい花崗岩に刻まれたケースが多いため、現在の和田地区中心部では近世中期までさかのぼる石神仏はみられない²⁶⁾。

近代以降の三者の関係をみると、王子製紙は遠山谷の共有林野の森林資源に注目して立

木伐採権を取得し、1896（明治29）年から伐採に着手した。しかし、乱伐により森林資源が枯渇し、同社は、大正期に遠山郷から撤退した。この地域は同社による伐採初期と伐採末期に大水害に見舞われたほか、和田地区中心部では疫病の流行や2度にわたる大火を経験した²⁷⁾。現地調査の結果、和田地区中心部に祀られている水神、津島神社、秋葉神社などの多くの石神仏は²⁸⁾、明治中期から昭和戦前期に祀られたことが分かり、当時の村人たちは大水害や疫病などからの救いを神仏に求めたと思われる。

さらに、1940年代に入ると国有林の伐採が開始された。1961年と65年には乱伐を要因のひとつとして大水害が発生した。昭和戦後期に入ると、それまでとは異なり、生活の合理化とともに林業景気にともなう和田地区中心部の近代化や医療施設の整備などが行われたこともあり、遠山谷では新たに神仏が祀られることはほとんどなくなった。

このように、遠山郷に祀られた神仏は、地域の歴史を教えてくれる存在である。

Ⅲ. 「神様王国」づくりのプロセス

本章では、順を追って「神様王国」づくりのプロセスを整理する。その際、表1のように構想期、設立準備期、充実期、安定期の4期に時期区分した。

(1) 構想期

構想期は2002年から2007年4月にあたる。筆者らが2004年に和田地区で開催された御柱祭を見学した際、改めて多くの神仏が地区内に祀られていることを認識した。当初はその背景を明らかにするために調査を開始したが、聞き取り調査や現地観察をすすめるうちに「神様王国」プランが浮上した。聞き取り調査中の雑談などで住民に「神様王国」プランを話すと、彼らは多くの神仏の存在は認識しているものの、そのこと自体が遠山郷の地

域の特徴や歴史的文化的資源であるという認識はしていなかった。

この「神様王国」プランは地域外の人々から興味をもたれ、やがてそれがテレビや新聞などのメディアに取り上げられるようになった。その結果、2006年10月に和田地区で遠山郷商工会主催による「神様王国」づくりに関する講演会が開催された。前年10月に南信濃と上の両村は飯田市に合併したが、いまだ合併の混乱が収拾していない中で講演会だっただけに、地域としては「神様王国」プランをすすめていく状況にはなかった。

(2) 設立準備期

しかし、飯田市との合併により地方自治体としての中枢機能が欠落し、観光交流²⁹⁾など村独自の事業が行えなくなった。前述した人口流出なども重なり、予想以上に地域が衰退し活力が失われてしまった。そこで、前述の講演会の主催者であり、また地域経済の活性化を図りたい遠山郷商工会が「神様王国」プランに賛同し、筆者らは2007年度から商工会のメンバーらと「神様王国」プランを運営していくことになった。

商工会は年間100万円の予算を組み、2007年度は「神様王国建設委員会」（のちに「神様王国運営委員会」と改称）の組織づくりのほか、神仏の案内板の設置やガイドマップの製作など、「神様王国」オープンのための準備事業を実施することができた。神様王国建設委員会（図3）は、商工会関係者のほか地域の歴史や神仏に造詣が深い住民と筆者らからなり、正副会長と「神様王国」のガイドを担当するガイド部を中心に、事務一般や調整などを担当する総務部と、「神様王国」の観光商品化やPRなどを担当する観光部という組織体制をとった。また筆者らは顧問として参画した。その席上では、参加者により毎回活発な議論が繰り広げられ、地域の衰退から脱却したいという熱意が強く感じられた。

表1 「神様王国」づくりのプロセス

年	月	内容	時期区分
2002年	9月	愛知大学地理学専攻「地理学野外演習」(藤田ゼミ)で南信濃調査	構 想 期
2004年	4月	南信濃で行われた御柱祭を見物：多くの神仏の存在を認識→以降、和田地区を中心に神仏調査を繰り返す行う	
2005年	1月	NPO法人が発行する雑誌に「神様王国」づくりに関するレポート掲載	
	春頃	長野放送の県域テレビ番組で「神様王国」紹介	
	7～8月	信州日報で「遠山郷に神様王国を」連載(8回)	
	10月	南信濃、上の両村が飯田市と合併	
2006年	2, 3月	愛知大学(豊橋市)で「神様王国」に関する口頭発表と論文発表を行う：飯田市議や南信濃の関係者が来聴→以降、毎年行う	設 立 準 備 期
	5月	飯田市議会での「神様王国」に関する質疑をうけ、飯田市企画課で「神様王国」づくりの説明を行う	
	10月	遠山郷商工会(以下、商工会)主催の「神様王国」づくりに関する講演を地域住民を対象に行う(和田・龍洞寺)	
2007年	5月	商工会総会で、同会が中心となり「神様王国」づくりをすすめること、「神様王国建設委員会」(以下、建設委)の組織化、予算化などを承認	
	7月	建設委開催：「神様王国」づくりの具体的説明、神仏巡り→地方紙で紹介	
	8月	神仏所有者や地権者に対して「神様王国」づくりの説明と協力依頼を行う	
	9月	建設委開催：神仏巡り後、「神様王国」構想を議論→以降、繰り返し建設委開催	
	12月	33ヶ所の神仏に説明板を設置	
2008年	1月	神仏と説明板を掲載したパンフレットを発行	充 実 期
	2月	「神様王国」を知った国交省の企画担当者らが非公式で遠山郷を訪問：国交省「新たな公」を知り、応募	
	3月	「神様王国」オープニングセレモニーと見学会開催：組織名を建設委から神様王国運営委員会(以下、運営委)に改める	
	5月	商工会総会で、2008年度の予算化が承認される	
	6～7月	運営委開催(3回)：「新たな公」の説明や今後の展開を議論	
	8月	運営委開催：「新たな公」の採択通知、商工会の予算化を中止する→順次、「神様王国」の整備を行う	
	9～11月	運営委開催(3回)：個別事業の進捗状況報告と議論	
	12月	モニターツアー実施：翌1月の運営委でアンケート結果報告、反省会	
2009年	2月	商工会が解散し、飯田商工会議所遠山郷支所となる	安 定 期
	3月	『神様王国ハンドブック』刊行	
	4月～	木沢地区で神仏調査を行う	
	8月	観光案内所にガイドを配置して案内機能の強化を図る：以降、継続	
	11月	岐阜県飛騨地方でガイド研修、現地ガイドらと座談会	
2010年 ～	1月	岐阜県飛騨地方のガイドを「神様王国」に招いてガイド養成事業を実施	安 定 期
	2月	さいたま市で「新たな公」助成を受けた関東甲信越ブロックの団体が一堂に会す：担当者より「事業仕分け」の対象となったことが報告	
		地元住民らを招いてワークショップを開催	
	3月	『神様王国ハンドブック(木沢版)』刊行	
	4月～	2010年度以降は飯田市より調査費の援助をうけ、八重河内、南和田地区で神仏調査を行う	

資料：「神様王国」づくりに関する諸記録により作成。

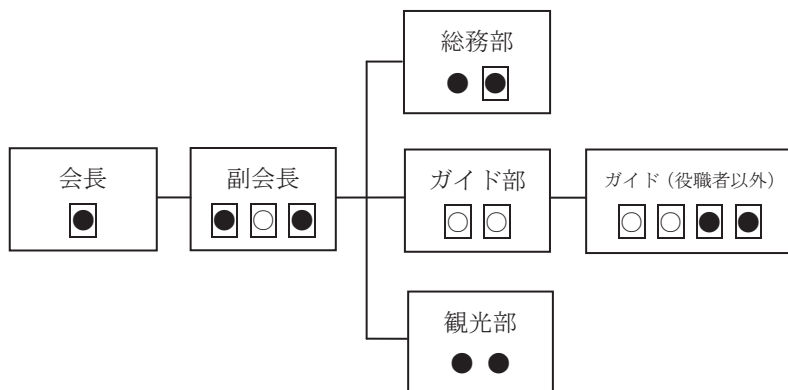


図3 神様王国建設委員会組織図

資料：「神様王国」づくりに関する諸記録により作成。

注1：のちに神様王国運営委員会と改称した。

注2：「●」は商工会会員，「○」は商工会非会員，「◐」「◑」はガイド。

神様王国建設委員の多くは、かつて南信濃村が独自に養成した「村民インストラクター」たちである。村民インストラクターとは、観光客らに村民が得意とする分野の知識や技術を提供しようとするもので、発足当初は活動の機会があったものの、その後は形骸化した。埋もれかけていた人的資源を再び「神様王国」で活用することができた。

以上のように、商工会が「神様王国」プランに賛同し、観光客を迎え入れるための準備が始まった2008年1月までが設立準備期である。

(3) 充実期

2008年3月に「神様王国」が正式に発足した。それに前後して、筆者らが国土交通省「「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業」（以下、国交省、「新たな公」）を知る機会があり、応募した。その結果、この「神様王国」が採択され、2008年度は250万円の助成が認められた。2008年度も商工会が100万円の予算を組んだが、それを取りやめて「新たな公」による助成金を用いて「神様王国」づくりをすすめることにした。

「新たな公」採択により活発化した神様王国運営委員会での議論のもと、広報用の「神様王国」の無料配付パンフレット、カレンダー、ポスター、ホームページ、のぼり旗などが順次つくられた。また、有償ガイド制を導入した。さらに「一店一品」運動を展開し、「神様王国」周遊ルート上にある和田商店街の各店舗で独自に商品開発³⁰⁾をしてもらい、経済効果を期待した。

2009年度も「新たな公」により250万円の助成を受けることができ、ソフト面を中心に整備がさらに進展した。また、モニターツアー客に行ったアンケート結果を踏まえながら、観光ガイド先進地である岐阜県飛騨地方でガイド研修を行った。このような一連の「神様王国」整備のほか、ガイド研修や日常的なガイド業務の成果を知るために、後述するように2010年2月には住民を対象としたワークショップを和田地区で開催した。さらに、和田地区に北接する木沢地区でも「神様王国」づくりのための基礎調査を行った。

(4) 安定期

しかし、民主党政権によるいわゆる「事業

仕分け」により「新たな公」が削減の対象となり、2010年度に予定していた事業が事実上中止となった。2010年度以降の安定期は、飯田商工会議所遠山郷支所の働き掛けにより実現した飯田市からの資金援助や、基礎的研究の段階から若干の資金援助を得ている愛知大学の研究費を利用して、新たに旧南信濃村内の八重河内、南和田の両地区で神仏調査を行っている。

筆者らは、地域の理解と協力を得ながら旧南信濃村内の4地区に「神様王国」を発足させ、最終的に合併山村が自立できるようにしたいと考えている。

IV. 「神様王国」に対する住民の認識と評価

本章では、このような「神様王国」づくりに対して、和田地区の関係者や住民はどのような評価をしているのかを検討する。そのために、住民らを対象としたワークショップの分析や、ガイドなどとして「神様王国」に関わる住民に対して行った聞き取り調査から、歴史的文化的資源を活用した地域づくりである「神様王国」の課題を提示する。

和田地区に祀られる多くの神仏は、個々の家が勧請した屋敷神であった。その後、家で祀る神が地域で祀る神になるケースと、屋敷神として個々の家のみで祀られ続けているというケースがある。後者は関係者以外には祀り手や神仏の来歴などが知られていない場合がほとんどである。祀り手の了解を得て「神様王国」巡りの対象とした神仏にも後者がみられ、神仏の案内板が立てられたことにより、関係者以外の住民がそれを認識したケースが多くみられた。また、前者の中には忘れ去られつつある神仏も少なくないが、住民が「神様王国」の神仏と新たに設置された案内板を通じて郷土の歴史や文化を再認識したといえる。

さらに、商工会や公民館などが主催する住民を対象とした「神様王国」巡りも開催され

ている³¹⁾。このような機会を通じて「神様王国」の存在が住民に知られつつあり、神様王国運営委員やガイドではない住民が「神様王国」を支える会員として集まりつつある。最近では地域の子どもたちが郷土学習のために「神様王国」を構成する神仏を教材に「むかしのからし」を調べたり、個々の神仏が写生大会のモチーフとなるケースもみられ、「神様王国」が地域の生活に根付こうとしている。

一連の「神様王国」事業の反省と今後の展望を整理するという目的で、「新たな公」による助成期間が終了する直前の2010年2月に住民参加型のワークショップ³²⁾を開催した。そこで得られた意見から、住民たちが「神様王国」をどのように認識しているかを示す。

表2は、ワークショップで議論された「神様王国」の現状、問題点とその解決方法を項目別にまとめたものである。まず、企画・運営では、「神様王国」の企画の工夫や、コース整備³³⁾が求められた。

PRでは、対地域内、地域外ともにPR不足が指摘され、地域内に対して地道なPR活動とともに「神様王国」を学校教育や社会教育で活用することが提案された。他方、地域外に対して、彼らは来訪した観光客に直接「神様王国」をPRすることより、まず地域外に居住する親族や知人にPRすることにより口コミでその存在が認知されることを期待し、さらに周辺地域との連携を図るなど、住民にとり身近な人物や地域から「神様王国」をPRしたいと考えている。

また信仰と観光との関係を見ると、一部の参加者から日常生活から信仰が遠ざかり、神仏が観光資源化したことを問題視する意見が出された。彼らは、神仏が住民のもとを離れ、地域外の観光客のものになりつつあると考えている。その解決方法として、神仏、祭り、昔話を結び付け、観光資源として生かし

表2 ワークショップの議論の要点

	企画・運営	地域内から地域内へのPR	地域内から地域外へのPR	信仰と観光との関係
現状・問題点	・「神様王国」の楽しみ方が分からない ・メンテナンス不足	・地域住民の認知、関心の低さ	・PR不足	・現代では日常生活から信仰が遠ざかり、神仏が観光客のための観光資源となっている
解決方法	・企画の工夫（スタンプラリー化、土産品開発、語り部の養成） ・日常的な清掃活動 ・コース整備、補修	・日常的、地道なPR ・地域行事を活用したPR ・地域の学校教育、社会教育で「神様王国」を活用	・地域外の近親者からPR ・周辺地域との連携 ・多様な情報媒体を活用 ・観光客を大切にする	・信仰と日常生活が離れないようにする ・神仏と祭りや昔話をリンクさせる

資料：ワークショップ記録により作成。

ながら、住民もそれに接して日常生活と信仰の距離を縮めたいと考えている。

以上から、住民は「神様王国」により地域の歴史や文化を再認識し、地域内外へのPRの必要性を感じている。また、「神様王国」を観光資源と捉えつつ、その前提として日常生活と信仰、地域と神仏の関係性を再構築したいと考えている。

それを受け、神様王国運営委員（以下、運営委員）や商店主として「神様王国」に関わる住民に対して、郷土の歴史や文化の再認識、「神様王国」のPR、信仰と観光との関係について聞き取りを行った（表3）。聞き取りを行った運営委員は60歳代以上であり、非運営委員は「神様王国」巡りの観光客も立ち寄り事業所の経営者である。

まず、郷土の歴史や文化の再認識では、彼らは神仏を含む歴史的文化的資源に関心をもっており、そのうち運営委員らは「神様王国」づくりを通じて秋葉道や自然環境などの神仏以外の地域資源にも着目するようになった。表中5は「神仏には関心なし」と回答したが、観光資源としての神仏の価値を発見した。非運営委員は、この地域の歴史的文化的資源や「神様王国」に関心をもつ来店者との

接触により神仏や霜月祭に着目するようになり、彼らと対話ができるように郷土の歴史や文化の学習を始めた。

また、彼らはワークショップで議論されたように地域内外に「神様王国」をPRする必要を感じている。地域内へのPRでは、多くの住民が「神様王国」を認知し、観光客を見かけたら神仏の案内ができるようになることを望んだり、若年層を「神様王国」運営に取り込むなど、地域をあげた取り組みにしていきたいと考えている。身近な人物や地域はもとより、歴史的文化的資源の観光商品化などを行いながら、積極的に観光客を誘致したいという思惑も感じられる。

信仰と観光の関係では、全員が神仏を観光資源として活用することを可としているが、考え方に差異がみられる。表中3、4、5、8のように賛成の者、表中1、6、7のように観光資源としての神仏の前提には、この地域で受け継がれてきた信仰があると考える者に分けられる。また、表中2は観光客に「神様王国」を通じて信仰の本質を知ってもらいたいという立場である。

このように、観光客と接触する機会の多い住民たちは、「神様王国」を地域資源とみな

表3 「神様王国」に対する住民の評価

	世代	郷土の歴史や文化の再認識	「神様王国」のPR	信仰と観光との関係
1	70	・整備を通じて秋葉道に関心	・観光客と積極的に交流 ・地域の若年層の取り込み	・住民の信心深さを知ってもらうことはよいこと ・霜月祭のショー化には反対
2	70	・郷土研究の深化に期待 ・研究方法に関心	・信仰の本質を知ってもらう ・研究発表会の開催	・「神様王国」を通じて信仰の本来の姿を知ってもらいたい
3	70	・仏像や自然環境に関心	・地域内外へ情報発信 ・全住民が案内できるのが理想	・神仏の観光利用は他地域でも行われている ・神仏が注目されることはよいこと
4	70	・自他ともに郷土の歴史を再認識	・地域外の親戚にPR ・観光客と積極的に交流	・多くの観光客に神仏の存在を知ってもらうことはよいこと
5	60	・神仏には関心なし	・「神様王国」と他の観光資源をセット化して観光客にPR	・神仏や霜月祭は観光資源という認識
6	50	・客の影響により神仏や霜月祭の自主学習を開始	・客に近隣の神仏を紹介	・神仏は観光資源 ・しかしテーマパークや集客のために創ったものではない
7	40	・客から「神様王国」の問い合わせがあり神仏を観光資源として認識	・都市住民との交流の場でPR	・神仏は心の支え ・しかし今日的な活用法はある ・神仏の盗難を懸念
8	30	・もともと郷土の歴史や文化に関心 ・知識がないと客と会話ができない	・インターネットの活用 ・地域全体にひろく周知させる	・神仏と接触する機会がなければ意味がない（神仏の価値が埋没）

資料：聞き取りにより作成。

注：年齢の高い者から降順に表した。表中の世代の数字は年齢(70は70歳代)、1～5は神様王国運営委員、6～8は運営委員以外。

しており、その存在が地域内外を問わずひろく認知されたいと考えている。ただし、ワークショップで議論されたように、観光資源化の前提として神仏のもつ歴史性と信仰の対象であるという事実は無視されてはいけなと感じている。

和田地区には祀り手以外には存在さえ知られていなかった神仏や、年数回の形式的な祭りが行われるのみの神仏が多い。そうした中で、和田地区では神仏の存在が「神様王国」により改めて着目され、「神様王国」という地域づくりや観光というかたちであれ、人々が神仏と「接触」(表中8)することでその価

値が保証されると考えられている。忘れられつつある神仏を掘り起こし、現代の視点で再評価しようという「神様王国」の基本理念が、一部ではあれ地域で受け入れられようとしている。

V. おわりに

本稿は、長野県飯田市南信濃において筆者らが住民とともに作りあげてきた「神様王国」づくりのプロセスと、住民の認識および評価を示した。

「神様王国」を構成する多くの石神仏は、林業や災害との関係性など遠山郷の歴史を教

えてくれる存在である。飯田市と合併した旧南信濃村は、合併により地域の活力を失ったが、筆者らが提案した「神様王国」づくりに賛同し、歴史的・文化的資源を活用した地域づくりに取り組むことにした。

松井圭介は「聖地の風景を読むことは、そこに生活する人びとの文化を知ることであり、同時にそれは風土を読み取ること」³⁴⁾と述べている。「神様王国」巡りをする人々に、南信濃の歴史や文化を読み取ってもらうことが「神様王国」の目的のひとつであるが、それと同時に忘れられつつある神仏という風景から、「神様王国」として新たな意味づけが行われることにより変化する風景も読み取らなければならない。

ところで、「神様王国」に関わる住民の間にも、信仰と観光との関係を中心に「神様王国」に対する考え方に微妙な差異があることが明らかとなった。信仰の対象である神仏を地域資源や観光資源として活用する意義や課題を慎重に検討することが必要である。筆者らアカデミック部門の研究者、商工会員や在野の研究者からなる運営委員、運営委員以外の住民たちとの間で前述した内省や意見のすり合わせを行い、絶えず「神様王国」の現状と方向性の確認をしなければならないだろう。こうした作業を繰り返し行いつつ、地域内外に対して「神様王国」の存在と意義を積極的に発信し続けていきたい。

そして、地理学でも「神様王国」づくりのような、基礎的研究を踏まえたうえで行われる「実用の学」としての応用研究がみられることを期待したい。

(愛知大学・院)

〔付記〕

本稿を作成するにあたり、神様王国運営委員会をはじめ飯田市南信濃の住民の方々と、助成を得た国土交通省、飯田市、遠山郷商工会、愛知大学中部地方産業研究所に対し、記して謝意

を表します。また、日頃よりご指導を賜り、「神様王国」づくりに携わる機会を与えて下さった愛知大学名誉教授の藤田佳久先生に感謝いたします。本稿は、第55回歴史地理学会大会（2012年5月、於新潟大学）の共同課題「旅・観光・歴史遺産」において発表した内容をもとに、大幅に加筆・修正したものである。

〔注〕

- 1) 藤田佳久「『社会的空白地域』の形成と森林、林業」（藤田佳久『日本山村の変容と整備論』地人書房、1998）、170-180頁。
- 2) 浮田典良編『地域文化を生きる』大明堂、1997。宮口侗廸『地域づくり—創造への歩み—【増補版】』古今書院、2002。山村順次『観光地域社会の構築 日本と世界』同文館出版、2006。
- 3) 日本民俗学会誌である『日本民俗学』で、フォークロリズムに関する特集号が組まれた。日本民俗学会「特集 フォークロリズム」日本民俗学236、2003、1-188頁。
- 4) 松井圭介「キリシタン・ツーリズムが展開する島々—五島列島（長崎県）—」（平岡昭利編『離島に吹くあたらしい風』海青社、2009）、23-40頁。
- 5) 八木康幸は、アメリカからもたらされたパブリック・フォークロアを「広義には、民俗的な伝統が、それを生み出した当初の基盤を離れて、新たな状況で表現されたり応用されたりすることを意味」し、「狭義には、学術機関以外の組織（中略）に所属する民俗学者が、一般の人々に対して民俗を提示する活動を意味」として定義している。八木康幸「パブリック・フォークロアと「地域伝統芸能」」関西学院史学33、2006、53-54頁。
- 6) 近年では、「公共」部門で民俗学に携わる者のほか、農林水産業や商工業の振興に携わる行政関係者も伝統文化の振興や商品化に関与している。前掲5）79-80頁。
- 7) 菅豊「現代アメリカ民俗学の現状と課題—公共民俗学（Public Folklore）を中心に—」日本民俗学263、2010、114-115頁。
- 8) ①中川 正「文化地理学とは何か」（高橋伸

- 夫・田林 明・小野寺 淳・中川 正『文化地理学入門』東洋書林, 1995), 1-19頁。
- ②中川 正「文化地理学研究の手順—発見・説明・解釈・応用—」, 「文化地理学の応用」(中川正・森正人・神田孝治『文化地理学ガイダンス—あたりまえを読み解く三段活用—』ナカニシヤ出版, 2006), 17-31, 172-179頁。
- 9) 宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版, 2008。
 - 10) 前掲7) 115頁, 前掲8) ②175頁。
 - 11) 2003年と2008年の人口・世帯数は, 2,234人・914世帯, 2,000人・884世帯である。
 - 12) 安藤慶一郎・矢守一彦によれば, 南信州に隣接する愛知県奥三河地方などでは多くの屋敷神が祀られている。遠山郷で祀られる「神様」は元々各家の神として勧請された経緯をもつ。しかし, 次第に家の神から地域で祀る神となるケースも少なくない。安藤慶一郎・矢守一彦「屋敷神一家と信仰」(安藤慶一郎・矢守一彦『国境いの村 天竜・奥三河の歴史的風土』学生社, 1972), 115-135頁。
 - 13) 本稿でいう歴史的文化的資源は, 今里悟之のいう「宗教景観要素」に近い。今里悟之「村落の宗教景観要素と社会構造—滋賀県朽木村麻生を事例として—」人文地理47-5, 1995, 458-479頁。
 - 14) 藤田佳久・高木秀和「南信州遠山郷の和田地区に「神様王国」をつくる基礎的研究」年報・中部の経済と社会2005年版, 2006, 187-206頁。
 - 15) 藤田佳久・高木秀和「遠山郷に「神様王国」をつくるプランについて」年報・中部の経済と社会2006年版, 2007, 113-131頁。
 - 16) 藤田佳久・高木秀和「南信州遠山郷に「神様王国」をつくるプランの実現へ」年報・中部の経済と社会2007年版, 2008, 107-124頁。
 - 17) 藤田佳久・高木秀和「南信州遠山郷「神様王国」のオープンとその運営・評価」年報・中部の経済と社会2008年版, 2009, 123-145頁。
 - 18) 藤田佳久・高木秀和「南信州・遠山郷「神様王国」の活動状況と木沢地区への拡大のための基礎調査」年報・中部の経済と社会2009年版, 2010, 89-116頁。藤田佳久・高木秀和「南信州・遠山郷八重河内地区の神仏調査研究—「神様王国」の地域的拡大をめざして—」年報・中部の経済と社会2010年版, 2011, 181-194頁。藤田佳久・高木秀和「南信州・遠山郷の南和田地区に「神様王国」をつくる基礎的研究」年報・中部の経済と社会2011年版, 2012, 147-164頁。
 - 19) 高木秀和「長野県遠山郷における地域づくりの展開と「神様王国」」(藤田佳久編『山村政策の展開と山村の変容』原書房, 2011), 169-193頁。
 - 20) 木沢小学校は1991年に休校した。
 - 21) 旧南信濃村において, 霜月祭が行われていたという確実な記録が伝わる神社は, 木沢地区6社, 和田地区2社, 八重河内地区3社, 南和田地区2社であったが, 2012年現在では木沢地区4社(うち2社は隔年交代), 和田, 八重河内地区はそれぞれ1社で行われ, 南和田地区は皆無となった。なお, 旧上村では4社で霜月祭が行われる。飯田市美術博物館編『遠山霜月祭の世界—神・人・ムラのよみがえり—』飯田市美術博物館, 2006, 114頁。
 - 22) 詳しくは, 前掲19) を参照。
 - 23) 藤田佳久「近世前半期における伊那谷の地域像を見る—近世伊那谷の絵地図から—」愛知大学総合郷土研究所紀要49, 2004, 67頁。
 - 24) 『南信濃村史 遠山』によれば, 遠山郷では1718(享保3)年にこの地域を震源とする遠山地震が発生し, 和田地区では遠山川左岸にそびえる盛平山の北西側斜面が遠山川の方向に向かって大崩落した。その結果, 遠山川の流路が変わり, 崩壊土壌の上に和田新町が形成された。さらに1719(享保4)年の「亥年の満水」では多くの田畑が流出するなどの被害を受け, 1721, 26, 31(享保6, 11, 16)年にも洪水被害に見舞われた。同時に天候不順も重なったことにより, 享保の飢饉が発生した。南信濃村史編纂委員

- 会『南信濃村史 遠山』南信濃村, 161-166頁。
- 25) 村田路人『近世の淀川治水』山川出版社, 2009。
- 26) その後の19世紀半ばの天保の飢饉の頃に祀られた「秋葉・金毘羅」の文字を刻んだ石神が伝えられている。
- 27) 前掲24), 204-205頁。
- 28) 一般的に, 愛知県津島市の津島神社は夏病みなどの疫病除け, 静岡県浜松市天竜区春野町の秋葉神社は火伏せの神として知られている。
- 29) たとえば, 南信濃村観光協会は「アンバマイカ」(地域の方言で「一緒に遊びましょ」の意) という村外者との交流組織を立ち上げ, 観光客のほか村外に住む南信濃出身者を第二の村民と位置づけていた。ところが, 合併により「アンバマイカ」は事実上解散した。
- 30) 従来から特産品として販売されている農産物や加工品のほか, 新たに間伐材や端材を利用した木製品などがつくられているが, 土産品として商品化しにくい商品を扱う商店も多いため, 商品開発はすすんでいない。
- 31) 聞き取りによれば, 公民館行事として行われる「神様王国」巡りは年2回ほどであり, 参加者は和田地区だけでなく旧南信濃村全域から集まる。参加者には, 婚入などで他地域から南信濃に転入した者も多い。
- 32) このワークショップは女性5人を含む19人が議論に参加し, 参加者を5人程度からなる4組に振り分け, グループディスカッションを行った。当日の流れを整理すると, 参加者の自己紹介, 筆者による遠山郷が抱えている諸問題の概説のあと, 遠山郷と「神様王国」の「よいところ」と「悪いところ」, ひろく「神様王国」を認知してもらうための方法と参加者自身で実践できることについて議論した。議論では, 全参加者が付箋に書いた意見を壁に貼った模造紙に添付し, 各組の代表が議論で出た意見を発表するという方式をとった。
- 33) 夏季に雑草が生い茂ると, ヤマヒルが棲みつきやすくなる。石段などは, 秋から冬季に落ち葉が積もると滑りやすくなる。急傾斜の石段や未舗装の山道など足場が悪いところもある。こうした状況から, 日常的な清掃活動とコースの整備が求められた。
- 34) 松井圭介「民衆宗教にみる聖地の風景」地理48-11, 2003, 42頁。